

事例から学ぶ～共同で資金調達活動

2010年度 第7回 2011年2月8日(火)

【学習目標】

ネットワークの意義と事例を知り、理解を深め、自らもやってみようと思うようになる。

(1) かながわ復興支援ネットワークの支援とは

講師：小俣 典之（特活）横浜NGO連絡会 理事長（講義実施当時）

「かながわ復興支援ネットワーク」の復興支援の流れ

「かながわ復興支援ネットワーク」は神奈川県内の国際協力NGO、自治体、地域国際化協会、企業、労組等と一般市民が手を取り、海外の被災地の支援に取り組む仕組み。「(特活)横浜NGO連絡会」が事務局を担い、常任の運営委員6団体(当時)で運営している。神奈川県内のNGOによる緊急支援後の復興支援が対象。地域の中で顔の見える関係を保ち、支援活動していることが特徴。

かながわ復興支援ネットワークの形成時、小さなネットワークであっても一定のルールを共同で考え、一つの書面にするとするのは、継続的な活動を続けるに当たって大切なことと考え、簡単ではあるが「規約」をつくった。支援の流れは規約に書かれ

ている。

いったん災害が発生すると「運営委員会(運営委員は常任)」を開き、被災地の状況や県内のNGOの動きなどを調査して、災害発生10日後くらいまでに支援の可否を決定する。支援が決まると「プロジェクト・チーム」を編成。同チームは、募金目標額、募金期間、広報先などを決定する。募金活動を開始して賛同団体を募る。賛同団体は募金および広報活動に協力する。資金の分配は「プロジェクト・チーム」が決定する。募金期間終了後、寄付者への報告を行い、同チームは解散する。

活動内容について

ジャワ島中部地震（2006年）での募金総額は190,362円。募金活動の手法は主に「チャリティ映画会」を開催し、入場券を販売した。インドネシアの文化紹介と現地活動の報告会を合わせた。ネットワークのメンバーである神奈川国際交流財団の会場を無料で借り、会場費などが浮いた。

ミャンマーのサイクロン被害復興支援（2008年）での募金総額は437,537円。神奈川県内の3団体がミャンマーを支

援していたので、その3団体への支援を決定した。このときの募金活動もイベントの開催やホームページ(HP)などでやった。

フィリピンの台風オンドイ被災地支援（2009年）では、3団体を支援先として定めた。映画「マリアのへそ」の上映会をし、監督に話をしてもらった。6回開催し、募金総額は230,120円。

ハイチ大地震復興支援（2009年）では、学校再建や教育支援を行っていた横

講師紹介



小俣 典之（おまた・のりゆき）
（特活）横浜NGO連絡会
理事長（講義実施当時）
2011年8月より、エグゼクティブ・プロ
デューサー／外務省NGO相談員

浜の任意団体を支援した。映画「ミラクルバナナ」を安く借り、上映会を開催。会場は神奈川国際交流財団の施設を無料で使った。募金総額は652,723円。

私たちのネットワークの特徴は「プロジェクト方式」。災害が起きると一定期間活動への支援をしてプロジェクトを閉じる、非常に短期的なプロジェクト。

募金額は決して多くはなく、広報、マスコミ対応、ウェブ作成など迅速にやる必要があるが、そのあたりの技術が難しい。賛同団体が駅前で街頭募金をするなど、その団体に応じた力を出す、という協力を促している。

支援金の分配の方式だが、例えば「3団体に支援する」と明確にした上で、それぞれの支援先のプロジェクトを紹介して、募金活動をする。その際、寄付したい団体を指定する「指定寄付」も受け付ける。指定寄付分はその団体に全額送り、それ以外の募金から事務局の経費を差し引いた残りを均等割りして配分している。

かながわ支援ネットワークの周辺には、横浜NGO連絡会で関わるJICAや横浜市役所などいろいろなネットワークがある。それ

ぞれ活動内容や組織の性格は異なるが、互いにつながりあうことによってネットワークの波及効果が高まる。

市民メディアとの連携も有効。横浜国際フェスタは、ユーチューブでライブ中継した。こういった技術は素晴らしく、活用できる。今はインターネットという武器を得て、ネットワークを飛躍的に進めることができる。

課題は、ネットワークを維持する労力が挙げられる。事務経費は頂いているが、余裕はない。募金額の少なさや、広報の力不足も問題。緊急時にすぐに動けるような募金活動の仕組みを用意しておかないといけない。また、神奈川県・横浜で活動している団体の多くは災害支援が主な活動ではなく、災害支援の事業運営能力の向上も必要。

評価点

- NGO間の連携強化
活動地域が同一のNGO間
活動地域の違うNGO間
- 共同作業の実施
- 地域国際化協会との連携
- 商店会、企業などとの連携
- 県民による被災地支援の一助
- ネットワーク継続、5年目

当日配布資料より

(2) ネットワークづくりの鍵とは

講師: 伊藤 道雄

(特活)アジア・コミュニティ・センター21 代表理事
日比NGOネットワーク(JPN) 世話人

ネットワークづくりにおいては、最初は皆が集まるが、数年経つと参加人数が減っていく。ネットワークづくりで大切なのは、共通の価値観と目的を共有し、何を達成しようとするのか具体的目標を明確にすること。それと分権制を確保すること。ネットワークというのは、参加者・参加団体の関係においては、水平であり、それぞれの主体的な参加が基本。といっても、日本でネットワークを機能させるためには、事務局の力量が鍵を握る。参加メンバー間のファシリテーター的役割のほか、共同活動を推進するための資金開拓能力が求められる。

アメリカの「インター・アクション」という国際協力NGOの連合体、すなわちネットワーク組織だが、予算規模において(特活)国際協力NGOセンター(JANIC)の3倍くらい大きい。収入の3分の1は会員団体から、残りの3分の2は連邦政府と民間財団から確保している。会員団体の会費額も、それぞれの予算規模に準じて決められている。

ネットワークづくりは、災害救援など緊急性のある場合によく行われる。また、社会の関心を集められるので募金もしやすい。ただ、注意しなくてはならないのは、集められた寄付金の使われ方。緊急事態なので、資金の使われ方が荒くなる傾向にある。こうしたネットワークの事務局は、会員団体の寄付金の使われ方をフォローして、寄付者や社会に対して責任ある報告をし

ていなくてはならない。

私の30年間のNGO活動を振り返ると、その多くはネットワークづくりだった。小侯さんがネットワークについて話されたとき、「仕掛け」という言葉が使われた。確かに、ネットワークづくりを行うとき、ある意味で「仕掛け」が必要だ。NGOのネットワークづくりは、単に会員団体間の関係づくりだけでなく、行政や企業等の他セクターとの関係づくりである。そうした他セクターとの建設的・創造的な関係をつくらないと、ネットワークづくりの意義がない。

講師紹介



伊藤 道雄 (いとう・みちお)
(特活)アジア・コミュニティ・センター21 代表理事
日比NGOネットワーク(JPN) 世話人